

田中隆尙撰集

第三卷

田中隆尙撰集 第三卷

平成十八年六月十五日印刷
平成十八年六月二十五日發行

著 者 田 中 隆 尙

發行者 唐 澤 明 義

發行所 展 望 社

郵便番號 一〇二・〇〇〇二
東京都文京區小石川三、一・七

エコービル二〇二

電話 〇三(三八一四)一九九七

FAX 〇三(三八一四)三〇六三

振替 〇〇一八〇、三、三九六二四八

印刷・壯光舎印刷／組版・エムツークリエイト

ISBN 4-88546-136-7

歌

論

目次

茂吉秀歌

はじめに	七
赤光秀歌	九
あらたま秀歌	五七
つゆじも秀歌	九五
遠遊秀歌	一一六
遍歴秀歌	一三〇
ともしび秀歌	一四〇
たかはら秀歌	一五四
連山秀歌	一六二
石泉秀歌	一七四
白桃秀歌	一八五

暁紅秀歌		一九八
寒雲秀歌		二〇八
のほり路秀歌		二三三
いきほひ秀歌		二三四
とどろき秀歌		二四〇
くろがね秀歌		二五〇
昭和十九年秀歌		二五五
小園秀歌		二六〇
白き山秀歌		二六九
つきかけ秀歌		二九〇
をはりに		三〇五
編集覺書		三〇九

茂吉秀歌

はじめに

先師齋藤茂吉先生の短歌を評釋することはいはばわたしの宿願であつた。わたしは戦後、先生の歌集がつぎつぎに出現するのを目のあたりにして、それぞれ感想批評のたぐひをこころみて歌誌にのせたことがあるが、先生の短歌を祖述する筆力がいまだたりず、字句を評釋する知識もなく、先生の寂滅とともに放棄してながくかへりみなかつた。しかるにいつしか身體の頽齡とともに、かつて待望した筆力も學力もかへつて衰退するのをおぼえ、ここに評釋を實行する決意をあらたにした。その間おほくの類書があらはれて、屋上屋を架するにいたり、字句の出典、解釋は當然これらの先行書の恩恵をかうむることになつたが、短歌の選出、評價に關してはわたし獨自の判斷によるつもりである。したがつて本文になほ存在價值が生ずるかどうかは、いつにその點にかかつてゐるといつていい。なほ「赤光」の底本は改選「赤光」とする。わたしが最初によんだのが改選「赤光」であつたし、たとひ改選時に筆がくはへられてゐても、このほうが製作年代順にちかいからである。

赤光秀歌

書よみて賢くなれと戦場のわが兄は錢を呉れたまひたり

第一歌集「赤光」の巻頭の「折に觸れ」と題し、明治三十八年と注のある一群十七首ちゆうの第三首である。戦場は満洲であり、「わが兄」は長兄守谷廣吉であらう。日露戦争が明治三十七年二月八日にはじまり、廣吉は二月十一日にはやくも歩兵少尉として召集されたが、戦場にむかつてたつたのは十一月十九日で、作者は新宿驛で伯父や伯母たちとともにみおくつてゐる。いまこの「戦場」を文字どほりにとれば、この「錢」は明治三十八年一月以降にうけとつたことになる。いづれにしてもこの「錢」はふつうの價値の錢ではなかつたし、「書よみて賢くなれ」にも感動がこもつてゐる。ただ書をよめとか、本代にせよくらゐにいつたかもしれないが「賢くなれ」とまではかいてなかつたかもしれない。おそらく作者自身の解釋か發想であらう。

これにひきつづき「戦場の兄よりとどきし錢もちて泣き居たりけり涙おちつつ」「はるばると母は戦を思ひたまふ桑の木の実の熟める畑に」などがあつて、六首連作のおもむきがあり、うれた桑の實があることから、夏の題材といふことがわかる。しかるに、明治三十八年夏には作者は歸省してゐな

いから、明治三十七年夏に歸省したときのことを想起してつくつたといふことになる。さうすると廣吉はまだ戦場にはいつてゐないのだから、工合がわるい。むしろ三十七年の歸省の事實と三十八年に錢をもらつたことをくみあはせてつくつたのかもしれない。

飯の中ゆとりと上る炎見てほそき炎口のおどろくところ

明治三十九年「地獄極樂圖」と題する十一首ちゆうの第二首で、作者自身「作歌四十年」に「明治三十七年十一月發行の子規遺稿第一編、「竹の里歌」を讀んで感奮し、作歌をはじめ」たのが、これら十一首である。子規のは「繪あまたひろげ見てつくれる」といふ詞書があつて、「なむあみだ佛つくりがつくりたる佛見あげて驚くところ」、「木のもとに臥せる佛をうちかこみ象蛇どもの泣き居るところ」……などといふのがある。それを模倣して、この「地獄極樂圖」といふ歌を作つたのであつた」といつてゐる。

一首ちゆうの「炎口」とは地獄の餓鬼道におちた亡者のことで、餓鬼道とは現世で人の利をかへりみず、おのれの利のみをおひもとめたものが、死後おちる地獄である。さてこの一首のもととなつた地獄圖はどういふものであつたか、片野達郎氏の「茂吉「地獄極樂圖」歌考」(「群山」昭和四十二年一月號)によると、亡者が川水をのまうとすると、水が火になつてたちのほる圖だといふ。もともとこの歌は佐藤佐太郎氏などの指摘のやうに、明治三十八年五月十四日づけの渡邊幸造あての書簡にある「水ものまず飯も食はずて眞裸に瘦せて炎口の泣き居る處」が原歌であるから、地獄圖で川水が火

になるのはそれでいいが、「飯」がゑがかれてないのが問題としてのこる。そこでもし、作者が童幼時にみてゐた圖に「飯」がなかつたとすれば、どこかほかの寺で飯をもつた椀がゑがかれ、やせおとろへた炎口がそれをたべようとするところと炎があがるといふ圖をみてゐて、それらがまじりあつたのかもしれない。いづれにしても地獄圖の忠實な模寫ではなく、幻想化したものを表現したのである。

來て見れば雪消の川べしろがねの柳ふふめり露の臺も咲けり

あづさゆみ春は寒けど日あたりのよろしき處つくづくし萌ゆ

凱旋り來て今日のうたげに酒をのむ海のますらをに髯あらずけり

みちのくの佛の山のこごしこごし岩秀に立ちて汗ふきにけり

明治三十九年「折に觸れて」二十首ちゆうの四首で、第三首をのぞく、のこりの三首は「作歌四十年」にひかれ、さらにそのうちの最初の二首は「明治三十九年一月はじめて伊藤左千夫先生に」送つたもので、「馬酔木の第三卷第二號に載つたものである。まへの地獄極樂圖から、もつと萬葉調にゆつたりと行かうとする傾向を示すに至つた」とある。歌には聲調が肝要なことを悟入し、それを實行して、すでにのびのびとした豐潤な聲調になつてゐる。萬葉集も身についてきたにちがひないが、それよりも郷里の自然にひさびさに接したよろこびがあふれてゐるやうである。

第三首の「海のますらを」は、開成尋常中學校の同窓で、のち海軍兵學校にはいり、日露戰爭に従

軍した海軍少尉市來崎慶一で、明治三十九年一月二十四日神田明神境内でもよほされた市來崎慶一凱旋祝賀會（開成同窓會）に出席したときの作である。「生きて來し丈夫ますらうがおも赤くなり踊るを見れば嬉しくて泣かゆ」が先行してゐて、渡邊幸造あて小林千壽の書簡に「會するもの十五人、事急なため少數だつたが盛な事筆に盡されなかつた。慶君、吞めぬ酒を大いに吞み大に酔ひ共に手を携へてダンスをやつた」とあり、參考になる。これにさきだち作者のゐた第一高等學校の寄宿寮では日本海海戰の勝報にストオムをくりかへし、巷では提灯行列、旗行列がおこなはれてゐたが、その複雑な現象から、いまだ作歌歴二年目の作者はやうやく凱旋した友を題材として、この二首を結晶せしめたのであつた。

とほ世べの戀のあはれをこほろぎの語り部かたべが夜々つぎかたりけり

月落ちてさ夜ほの暗く未だかも彌勒みろくは出でず蟲鳴けるかも

ヨルダンの河のほとりに蟲鳴くと書かに残りて年ふりにけり

いづれも新聞「日本」の明治四十年十一月二十六日に左千夫選の「蟲」といふ課題に應じて、のせられたものである。課題に應じてつくつたのだからまさしく題詠であるが、いづれも題詠ともおもはれぬ、わかかわかしいみづみづしさをたたへてゐる。作者はおそらくこの課題をみて幾晩かつづけて、こほろぎや、かねたたきなどの蟲の聲にききいつただらう。さうして、こほろぎもかねたたきもそれぞれ毎晩はおなじ時刻におなじ場所でなくのを觀察しただらう。そこで「夜々つぎかたりけり」といふ句がうまれたのだらう。「とほ世べの戀のあはれを」と、まるで物語そのもののやうに馥郁とし

た綾をおりなし、それを下句の寫生の骨組でささへたのである。ゆたかな幻想をはせめぐらせながら、どこかで現實に足をささへてゐる。これが茂吉初期の歌の特色のひとつであるが、この現實の足がかりをうしなはなかつたのはおそらく「竹の里歌」をまなんだたまものであらう。

第二首は佐藤佐太郎氏の指摘によれば、大正十三年十二月の青山腦病院の火災にやけのこつた初期歌稿があり、二二句は「現しき世月讀は落ち」となつてゐて、これが原作で、「月落ちてさ夜ほの暗く」は左千夫が筆をいれたのだらうといふ。この一首は左千夫の添削によつて、みちがへるほどいい歌になつたが、さりとて原作者の功績がないわけではない。ただ一首は月がおちたあと、もうでさうなのに、まだでないといふから、なにか天體がでてくるのかとおもふと、彌勒菩薩がでないといつて、はぐらかされてしまふ。彌勒は釋迦入滅後五十六億七千萬年に出現して一切衆生を濟度するといふ菩薩だから、そのままとれば、空想も空想といふことになつてしまふ。しかしこは塚本邦雄氏が指摘してゐるやうに梁塵秘抄の「釋迦の月は隠れにき、慈^じ氏の朝日は未だ遙か、その程長夜の闇きをば、法花經のみこそ照らいたまへ」からきたとおもへば氷解する。つまり釋迦が月で、慈氏の朝日が彌勒だからである。

第三首は「ヨルダンの河のほとりに蟲鳴くと書に残りて」と舊約聖書かなにかをみたやうな句があるので、塚本邦雄氏が「ヨルダン河畔に蟲の鳴くのを傳へた書とは初耳だ。少くとも新舊兩聖書に出て来る昆蟲の中に鳴蟲はゐない。飛蝗、蝗、甲蟲、蜜蜂、黃蜂、蟻、臘脂蟲、虱、蚤、蚊、蠅、衣蛾^{いが}、蠶蛾、これくらゐだらう」といひ、吉田漱氏はそれをうけて「イソツブ寓話集」をさがして「きりぎ

りす」をみつけだしヨルダン河畔と關係づけようとして、けつきよく蟲と空想幻想世界との結合からうまれたものだらうといつてゐる。後世の學者ふたりにこれだけの調査をさせただけでも、この一首の價值が證明されたといつていい。

かうして右の三首はいづれも幻想をはせて成功した歌であるが、後年「アララギ」の歌風が寫生ひとすぢにかたまつてくると、かういふ歌風の影がうすれ、「作歌四十年」にもこの一群から一首もひかれてゐない。しかし作者初期のひとつの特色として、また生涯をとほしてときどきうかびあがつてくる傾向として、みのがすことのできないものである。

今しいま年の來るとひむがしの八百うづ潮に茜かがよふ

高ひかる日の母を戀ひ地の廻り廻り極まりて天新たなり

東海に磯駈廬生れていく繼ぎの眞日美はしく天明けにけり

「新年の歌」と題する十四首ちゆうの三首である。明治四十一年の新年をむかへて興にのつてつくつた一連であるが、かういろいろと題材をかんがへだすところは題詠といつてもよく、作者自身「作歌四十年」で「題詠的であるが、いろいろと工夫して、調べも莊重に、萬葉調に行かうと努力して居る。長塚さんが第二首を褒めて、齋藤君は科學者だから、科學者らしい大きい歌だと云つてくれたのである。なほこの一聯の中には、「ひむがしの朱の八重ぐもゆ斑駒に乗りて來らしも年の若子は」などといふのもあり、斑駒は古事記にある語だから、さういふものをも取入れて、古調に到達せむと骨折